



## 脱原発世界会議2012YOKOHAMA 報告書

- 企画タイトル トークライブ「リアルにはっきりと、日本を変える話をしよう」
- 日時 2012年1月14日(土)  
19:30~20:30(60分)※会議プログラム上  
20:00~21:00(分)※実際の企画時間
- 場所 1Fメインホール
- 企画参加人数 約750名
- 文責 小野寺愛(ピースボート)
- 登壇者
  - 小野寺愛/ピースボート(司会)
  - ラファエル梅村昌弘司教/カトリック横浜司教区教区長(挨拶)
  - マエキタミヤコ/広告メディアクリエイティブ[サステナ]代表
  - SUGIZO/ミュージシャン
  - ピーター・バラカン/ブロードキャスター
  - 中沢新一/人類学者
  - 手塚眞/ヴィジュアルリスト
  - 加藤登紀子/歌手

### ●オープニング映像 STOP ROKKASHO

### ●企画の中でどんなことが発表されまた話し合われたか

日本では、少なくともインターネットの調査では、原発が要らないという人が8割という結果があります。ところが、政治家や官僚が大きな流れを決めている現実の世界では、それが国民の意見の大勢を占めているとは認められていない。この差は、どうしたら乗り越えることができるのでしょうか。つまり、国民の大半の気持ちは脱原発に向かっているけれど、それをリアルな世界で行動に結びつけるためのツールが足りていないという状態を乗り越えるため、6人の登壇者で具体的な策を話し合いました。

加藤登紀子：「原発国民投票の話がされていますが、2022年では遅いです。一刻も早くとめなければならぬという事態は、もうずっと前から決まっていた。子ども達を放射線の被害からどう守るかを話さなければならぬときに、中途半端に原発を支持するのかしないのかというような議論をしているがために、真剣な意味で子どもをどう守るかという議論に、国が向かえていない。これからのエネルギーをどうするのか、循環型社会はどう作るのか、人間のあるべき未来の姿は何なのか、本当に大切なことを話し合う出発点に立つために、一刻も早く脱原発しましょう。今日は、そんな話を進めてくれそうな、“日本版のみらいの党”を作ると本に書いた中沢新一さんにお会いできるので、興奮しています。」

中沢新一：「3月11日以降、僕の人生は大きく変わりました。福島第1原発事故の様子が刻々と伝えられてくる中で、自分が何をしなければならぬかがはっきりと見えるようになりました。言葉や心、バーチャルな世界で伝えられているものを現実世界でリアルに結びつけなければならぬ。国民の大半は脱原発に向かっているけれど、それをリアルな世界で行動に結びつけるためのツールがまったく足りていないのです。そこで、日本で緑の党

をつくろうと決心しました。まずは、『グリーンアクティブ』といって、脱原発を含め、将来的に日本で緑の党になっていくであろうゆるやかなネットワークを作りました。その中にいくつものグループが参画します。たとえば僕がやる、農林水産業を活性化し、地域経済を変えていくグループ。自分で思ったことを街頭に出て表現しなくてはならない、デモを新しく変えていこうというグループもある。そして、バーチャルな世界の民衆の意見を、現実世界につないでいくための重要なツールとして、政治がある。議会制民主主義の国家ですから、政治のツールが必要です。そこで、『みどりの日本』という政党を作りました。近い将来、国政選挙がおこなわれる際には、他にもすでにあるみどりのグループと選挙協定を結んで、戦いたい。登録も済ませたので、実在する団体です。日本は、この経験から変わっていかねばいけないと確信しています。皆さん、参加してください。」

ピーター・バラカン：「みどりの日本、おめでとうございます。記者会見はどこでやるんですか？日本の記者クラブ？ちゃんと報道されるかな？(会場笑)日本のマスコミは、もう情けないくらいですからね。僕は毎日、そういうマスコミの中で仕事をしている人間ですが、イライラします。言うべきことを言わせる番組がいくつかはあるけれど、まだ圧倒的に少数派です。『脱原発8割』の民意を政治に反映させるためにも、大阪と東京で住民投票を実現させようとしている人たちがいます。ぜひ応援しましょう。そして、メディアが言うことに対して、これは違うと思ったら、きちんと伝えていきましょう。ディレクターもプロデューサーも、一人の声を、意外と気にします。そして、情報源を自分で持たなくてはならない。テレビや新聞に期待できない情報はインターネットなどを使って自分で得る時代です。あそこにいけば、信頼できる情報がある、という場所をみんなで作っていかなくてはならないですね」

SUGIZO：「民主主義を最大限に利用しない手はありません。これまで、日本に住んできた僕らにはこの自由が当たり前で、なんとなく生きてきた。3月11日以降、変わるべきだと思います。未曾有の大震災を体験したのに、マスコミも政府も生ぬるいことをやっている。自分達が大きな学びを得たことを未来につなげるために、実践していかないと。犠牲になった方のためにも。ネットの世界、つまりみんなの自由意志の上では8割の人が脱原発を求めている。震災前はマイナーな存在だったけれど、今は脱原発がメジャーな意識なんです。それを実現できるのはここに集まっている僕らであると信じています。この先、安全な未来を生きたいというたくさんのムーブメントをひとつに束ねて、大きな力に変えていきましょう」

マエキタミヤコ：「311以降、『エネシフジャパン』を立ち上げて、超党派の議員と国民の勉強会を開催してきました。この会議は誰でも話が聞けて、質問が聞ける場にしたい。その場にいる人の悪口を言わない、責めないというルールがあるだけ。民主主義をどうやって高めていくかという場です。私たちは311以降、たくさんのことを知らされていなかった。知っていることと知らないことがまだら模様です。今でも、原発は安全でクリーンなエネルギーだと信じている人がいます。原発についての是非を話してケンカをするのではなく、大切な人と『知ってる？誤解してない？』という対話をしてください。もともと日本に54基あった原発は今、5基動いています。3月になると、全部止まります。この春、日本が脱原発しますが、それでも私たちはそれほど困らないはず。なぜなら、電気の代替はあるからです。マスコミがなんて報道するか、みんなで見ていきましょう。そして、近くの人に『大丈夫？騙されてない？』と確認しましょう」

手塚眞：「震災直後、東北でも電気が止まりました。私達の生活全般、医療でさえも電気に頼りすぎていたがために、電気が止まった瞬間に生きるか死ぬかという方がたくさんいました。20数年前、私の父親が生きていた時代から、反原発の世論が盛り上がった時期がありました。それからどうなったか。私達は、より電気が必要な社会を創ってしまった。20数年前にはなかった携帯やパソコンを今僕らはみんな持っている。おかしいな、あれ？と思いながらも、電気はなくちゃいけない、原発はなくちゃ困るという意識にさせられてしまった。でも、あの事故があった後は、さすがに、電気に頼る生活は、もうそろそろいいんじゃないかと思えます。そのために、僕は3つのKを提案します。感謝、覚悟、確信です。電気を使うためにスイッチをつけるたびに、ありがとうございますというくらいの感謝。省エネするぞという覚悟、原発のない暮らしも、絶対にできるという確信を持って生きていきたいです」

個人のレベルでできること、つまり省エネ、メディアへの働きかけ、デモや勉強会への参加といった具体的行動のほか、将来的に日本で緑の党になっていくであろうゆるやかなネットワーク立ち上げも発表され、会場からの拍手も絶えないトークでした。登壇者たちが楽屋でも意気投合し、「グリーンアクティブ」への音楽や映像参加、イベント共催の提案が飛び交っていました。「リアルにはっきりと」日本を変える話をしよう、という当初の目的は、大成功で達成されたと感じました。



(写真:佐藤秀明)